

竹田青嗣著「中学生からの哲学超入門—自分の意志をもつということ—」

ちくまプリマー新書 筑摩書房 2009年7月10日刊を読む

現象学とは何かを考える

1. 自分の感情の海の中に、絶対的にそうだと思えることと、この先はもう何とも確信をもてないことと、そしてその中間地帯との、3つの領域の境界線がはっきりある。 P33

2. 誰でも自分の心を内省して、ここまでは確実だと言えるが、あるところまでいくと、そこから先はどうしてもそれ以上確実なことが言えないという分岐線にぶつかる。でも、誰でもその分岐線を意識できるし、言うことができる。 P34

3. 大事なのは、

(1)第1に、どんな記憶にもこういう確信の「度合い」があるということ

(2)次に、われわれは、記憶を反復してその「度合い」を確かめることができること

(3)最後に、そのことだけが、だれにとっても、自分の記憶の確信の最後の根拠になるということ。

\* こういう内的な確かめ方を現象学では、「本質観取」と言いますが、要するにこの分析は、記憶の確実性の根拠をよく示します。 P36

4. 現象学は、「正しい認識」という問題を、「正しいか間違っているか」という枠組みではなく、「どのていど確信と納得の条件があるか」という枠組みに書き換えました。あるいは、認識を、「真偽」の問題から、「確信の根拠」の問題に編みかえたのです。 P36

5. 内的な認識の根拠

(1) こういう心の問題は、まず、「絶対的な答えが取り出せない」領域だ。これはたとえば、人類がどこから発生したかといった問題とは違って、実証でだんだん確かめられていくような問題ではない。事実の問題としては、どこまでも“蓋然的<sup>がいぜん</sup>な”答えしか出ないということ、これが1つ。

(2) こういう「心」の問題は、科学的実証の問題とは「本質」が違っていること。つまり、むしろわれわれの心のうちの「了解と納得の問題」「ああ、こうだったのか」という自己了解の問題だ。 P39

## 6 . 認識問題

人間ははたして世界を正しく、正確に認識できるのか。

(1)人間が何かを認識するというとき、事実を知るという問題と、「了解する」とか「納得する」という問題は、本質が違うということ。

(2)次に、前者は「誰が見てもこう見える」を探す方法だけれど、後者は、「自分の中でぎりぎりこう了解するほかはない」という形で、いわば“後ろ向き”に現われる納得の問題であって、両者をはっきりと区別する必要があるということ。そして、人間や社会の認識の場合は、後者のタイプの認識である、ということ。 P39 ~ 40

7 . (1) 「絶対的な真理」の条件というものは決して言えない(数学のような場合を除く)。

だけど、「われわれのうちに、確信が生じたり生じなかつたりするその根本の条件は、必ず普遍的な形で言うことができる」

(2) 人間や社会の問題では、何が「真理」か、誰が「真理」をもっているか、と考えてはいけない。

たくさんの人間がそれぞれ自分の確信をもち、その確信を交換しあっている。

だから、そういった多様な確信が、どのような条件があればうまく交換され、共有されあうのか、ということをはっきりさせることが認識問題の本質である。 P41

8 . (1)われわれが果たして「正しい考え」をもっているかどうか、が問題なのではない。

(2)人間はいろんな考えをもつが、それがその人間にとってよい意味をもつのか否か、また他者たちとうまく調整可能なものかどうか、そのことだけが本質的である P41 ~ 42

## [ コメント ]

混迷の時代になればなるほど「哲学的思惟」が求められる。現代認識論の基本である現象学的思考は、絶対主義や相対主義を乗り越えるものとして参考になる。

- 2009年6月23日林明夫記 -